世界の予定と私の役割

ジェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の予定と私の役割

【Ｎコード】
Ｎ９２６１Ｚ

【作者名】
ジェル

【あらすじ】
世界に役割（キャラクター）がいる。そう思った”それ”に、強制的にキャラクターにされた”私”は、指定された選択肢通りに生きていくはずだった。しかしっ！！やってらんねえよ！こんな役割やだよ、ざけんなよ！なんで私がこんな目にぃぃぃっ！！世界の支配から逃れるため、独力で頑張ります。――自分が仕える姫が慕う王子に見初められた”私”は、姫にひどい仕打ちを受け始める。逃げ出したいけれど、選択肢にそんなものはない。死ぬことすらできない。世界に絶望していたそんなとき、城をある悲劇が襲い――…

役割を与えられた彼女の本来の使命は？支配から逃れることはできる？

ちょいちょいコメディ入ります。ふざけます。

主人公、性格ぐずぐずです。

＞PROLOG　one

――――役割が要る。

……それは思った。

――――自分の役割を全うする忠実な役割（キャラクター）が。

――――歪み始めた全てを正さなくてはならないと。

――――ねえ、それは、正解？

▲▼▲▼

――あなたは候補に選ばれました。

――次の問に答えて下さい。

Q. あなたは、世界をどう思いますか。

A. □□□□□□。

Q. あなたは、他人に興味がありますか。

A. □□。

Q. あなたは、どうしても忘れたいことがありますか。

A. □□。

Q. 逆に、どうしても忘れたくないことがありますか。

A. □□。

Q. あなたは、考えることをやめたいと思うことがありますか。

A. □□□□。

Q. 最後に、あなたは、自分のことが好きですか。

A. □□。

機械音がする。

――――――おめでとうございます！

…機械音とノイズ。
そして、何人もの老若男女の混ざった声。

――――――見事、合格です。

- - あなたには、［××の×××］が与えられます。

また、機械音。

……なんだ。
……なんなんだ。

- - 《起動中》。

不意に、じゃあ、と弾んだ声。

――――――行ってらっしゃあい。

▲▼▲▼

- - 〔初期設定〕を行います。

×名前を決めて下さい。

何？

名前？

---名前は、初期設定［ランジェ］で決定しました。

×性別を決めて下さい。

え、ちょっと待ってよ。

何？　これは何なの？

---性別は、初期設定［女］で決定しました。

×今の時間を設定して下さい。

時間って何？

何の話？

ねえ、答えてよ。

わからないの。

何も。

どうなってるの？

ここはどこなの？

……どうしてこんなことに？

---時間は、初期設定［１２：００］に決定しました。

---あなた の話をしています。

---あなたの記憶は書き換えられます。

---項目〔初期設定〕を行っています。

---ここは、どこでもありません。

---これは、【Ｉｔの意志】です。

ノイズが話していることを、半分も理解できない。

錯乱する気持ちも、何故か曖昧になっていく。

何の話をしてたっけ。

何としゃべってたんだっけ。

私は…

…ああ、私は…誰だっけ。

ランジェ？…ランジェか。

違う。違う？違わない。

ううん、違う。

あれ、何が違うのだっけ。

頭から何かが、いや、私の全てが抜け落ちていく。

---〔リセット〕が完了しました。

---《ループ》が受理されました。

---【物語】が始まります。

そして、辺りが明るくなる――…。

---【Ｉｔの意志】は叶えられました。

――――――全てが揃いました。どうするの？

---キャラクターが設定、並びに《ループ》が指定した通りに行動すれば、問題ありません。

――――――全ては、歪みを正すために。

---いいえ、全ては【Ｉｔの意志】です。

---【Ｉｔの意志】への、《ルーティング》が完了しました。

---よって、この空間は〔閉鎖〕されます。

---カウントダウンを行います。

---５。

――――――え、もう？私がシャットアウトするまで、ちょっと待ってくれない？

---受理されません。中枢機関への《アクセス権》が認められていません。

---４。

――――――じゃあ、巻き込まれない内に消えることにします。……

……よし、じゃ、ばぁい。

――3。

――2。

――1。

――《シャットダウン》――……

1―1（前書き）

抽象的な微妙な性的描写があります。
苦手な方はお気をつけ下さい。

1／1

▲▼▲▼

———そして。
幾つかの時が流れる。

「ランジェ！！」

自分の名前が、耳障りな金切り声で呼ばれる。
途端に、私の意識は浮上した。

「いかがなさいましたか、」

目の前でふんぞり返っている彼女に、私は慌てて駆け寄り、頭を下げる。
耳に届くのは、くすり、と嘲るような笑い。

「あんた、脱いでみなさい」

は？

冷たいそれは、理解し得ない言葉だった。
固まる私に向かって、彼女は感情のままにティーカップを投げつけた。

「脱げって言ってんのよ！」

私の言うことが聞けないのか、と。
癇癪持ちの彼女が投げたカップは、私に当たって床で割れた。
熱い紅茶が、服にかかってヒリヒリする。張り付いた服はとても気持ちが悪い。

「私をいつまで待たせるつもりなの！？」

尚も叫ぶ彼女を、私はどこか冷静に見つめていた。
精巧に作られた人形のような彼女の顔は、真っ赤に染まり、目をつり上げて、醜悪に歪んでいる。
――そうだ、脱がなくちゃ。
でも、何故、私は脱がなければならないのだろうか。

疑問に思っても。残念なことに、私の〔選択肢〕は〈脱ぐ　しか用意されていない。

そろりと、紅茶で汚れた服のボタンに手をかけた。
構わない。脱ぐぐらいなら構わない。

パサリと衣の音がして、私の足元に服が落ちる。

「いいんじゃない？あんた、私の変わりにヤられてよ」

しばらく私を眺め回した彼女は、そう言い放った。

…何の話か。

私は愛想笑いを浮かべる。

「姫様？」

「お父様、既成事実を作るつもりなのよ。私と隣の国の王子と。今夜、親公認の夜這いに来るそうよ。侍女なんだから、あんたも知ってるでしょ」

無愛想に言いながら、彼女は不遜な振る舞いで私に近寄る。

パキ、とカップが踏みつけられて割れた音がした。

「ね、王子サマとできるの、あんたも嬉しいでしょ？このまま一生処女かもしれないあんたに、女の喜びってやつを教えてあげようって言ってんの。断ったりなんて…しないわよねえ？」

――ふざけないでよ。あなたみたいな女に、そんなことのお膳立てなんてしてもらいたくない。なんで私が、あなたのために身を捧げなくてはいけないの。

無意識に眉をひそめたのだろう。彼女の瞳は途端に淀む。彼女の細い手は、ぎりっと爪を立てて、私の肋骨あたりの皮膚を抓る。

「い…っ」

「何？何か文句あるの？　いくら王子サマだっていったって、中身はただの中年オジサンとはやりたくないのよね、私。侍女って、主が困ってたら助けるのが仕事よね？　私が主人なんだから、それくらいのこと、してみせなさいよ。あんたなんて、いつでもクビにできるのよ？」

ギリギリと力を入れられる指。目のふちで、赤い血が流れているのが見えた。

クビにされては、困る。

私の家は没落した貴族で、私がここで働いて安定した収入を得ていないと、両親だけでなく、まだまだ小さい弟や妹、働いてくれているメイドたちも、路頭に迷わすことになってしまう。

――そんなことは、断じて避けなくては。

たとえ、私がどんな目に合おうとも、だ。

「わか、りました」

震える声で答えれば、彼女は嫌みな笑顔で指を離した。

「当たり前でしょ。　カーテンを締め切れば、夜だし、顔なんてわからないわ。いいわね、きちんとやるのよ。オジサンだからって嫌がって、あっちに不快な思いをさせたりしないでよ」

ふんっと、小さく鼻で笑い、私を軽蔑した目で見る。いつも通りの蔑む視線。

彼女は満足げに、純白のドレスの裾を翻してテラスに消える。

――寒い。痛い。
…息が、し難い。

姫、という立場がそんなに偉いのか。
彼女の全く苦労の知らない背中を見つめながら、私は歯を食いしばった。
親が王だっただけではないか。
しゃがんで、茶色に汚れた服を広い上げる。濡れた服はもう、冷たくなっていた。
姫？姫だから何なんだ。
あんたが持ってるのは、全て、産まれたときから与えられたものだろ。
自分で掴み取ったものが全くないあんたの、どこが偉いのか。
滲む視界を、上を向いて耐えることでしのいだ。
だって、泣いたって、何も変わらないのだ。

「アイトレット姫様。ユーキリアス様がいらっしゃいました」
侍女仲間が、私に言う。
視線は、私を哀れむように細められ、そして伏せられた。

侍女仲間たちに、風呂に入れてもらい、いい香りのする香水をつけてもらって。
私が一生働いても手に入らないくらい高価なネグリジェを身につけて。

彼女が何の努力もせず、いつも当たり前のように享受しているそれらは、私の人生ではこれから先、一生与えられないものだ。
噛み締めた歯が、ギリ、と音を立てた。

何故、彼女は私を選んだのだろう。でも、そんなことはどうでもいい。私はへまをしないよう、事をやり過ごすだけだ。

「…どうぞ」

小さく呟いた。
この音量なら、本人と違っていても気が付かないはず。

「失礼します」

不意に、聞こえた落ち着いた声は、思っていたより若々しい。

おかしいな、と私は首を傾げた。
隣国リクセルーゼの王子は、齢４５歳ではなかっただろうか。
にしても、声が若すぎやしないか？　だってまだ、変声期が過ぎたばかりのような、少し幼さのにじむといっても過言ではないような声音である。
すっと、衣の擦れる音がして、影が寝室に現れる。

「はじめまして、アイトレット様。リクセルーゼ第三王子のオズ

ファルスと言います」

柔らかい雰囲気を纏った影が、囁くように話した内容に、私の思考は停止した。

……は？

第三王子だと…？

オズファルスだと？

思わず、失神しそうになった。

来るのは、第一王子のユーキリアスじゃなかったのか？

オズファルス第三王子といえば、齢１８の頭脳明晰・容姿端麗の優良物件。夜会では、数多くの姫君から誘いが殺到するという、隣国リクセルーゼの王子だ。

なぜ、何故？

話では、彼女はユーキリアスの側室になるとのことだったのに、何故そんな優良物件のオズファルスが、こんな小国に？

戸惑う私の様子を察したのか、彼は、少し笑った気配がした。

「すみません、少し情報操作をさせてもらいまして…」

返答は、私が疑問に思ったところと少しずれていたが、でも納得できるものであった。

あの大国ならば、このちっぽけな国相手だ、それくらいの情報操作は問題なくやってみせるのだろう。

…では、何故そのような情報操作を？

しかし、次第に私はそれどころではなくなった。

――どうしよう。
オヤジだから、こっちも恥ずかしくないだろうと嫌がるのも諦めたのだ。オヤジだから、構わないかと思ったのに！
年下とだなんて…、１８歳とだなんて、嫌だ！

それに、彼は…
彼女がお慕いしている方。

…私と彼が、そんなことになるなんて許されない。

姫に知らせなくては。
あなたは、オヤジとなさるのではありませんよ、と。
あなたが、夜会で見たときから慕っていたオズファルス第三王子としなさるのですよ、と。
いずれにせよ、私が酷い目に合うことは決定であった。
知らせなければ、彼女から。
知らせれば、オズファルスから。
でも、私は知らせなくちゃならない。どんなことをされようと、私は彼女の侍女であるのだ。

少し待っていただけないかと問おうとしたとき。

ピコ、と可愛い音がなった。

→〈近づく
〈嫌がる
〈黙る

ああ…、またか。
左側に小さく現れた表示に、私は眉をひそめた。
――――〔選択肢〕だ。

この表示があるときは、周りの時間は止まっているらしく、誰も動かない。
物心ついたときから、これは現れて、私に選択を迫る。否が応でも、〔選択肢〕以外の行動をとることはできなかった。
そして、この場合、どうやら私に〈知らせる　という〔選択肢〕は用意されていないらしい。
しょうがない。一番無難な選択を。

〈近づく
〈嫌がる
↓〈黙る

決定だ。

「姫？」

訝しげな彼の声を無視する。

私以外の人にも〔選択肢〕の表示は行われているのか。それを尋ねたいと思っても、尋ねるという〔選択肢〕はなかったので、それを知ることは過去出来なかった。

「……姫？」

そっと近づいてきた彼に、私は顔を伏せた。
ふわりと、優しく私の腕を掴む。びく、と肩が震えてしまい、大丈夫だと思っていた自分が、存外緊張していることにびっくりした。

「……かまいませんか？」

あくまで優しく問う。知らず、体に力が入ったのがわかった。

「…はい」

蚊の鳴くような声で、私は答える。
そっと、私の顎に手がかけられた。少しごつごつとした、節くれだった男の手。腰にも触れる程度に手がかけられる。
思わず、ぎゅっと目をつむる。
すると、くす、と柔らかい笑い声がした。

「…そんなに、緊張しないで。体の力、抜いて下さい」

宥めるようなそれに、かあっと、顔が熱くなるのがわかった。

な、なっ！？
ば、何を言…っ！？

支離滅裂な思考から、羞恥と怒りと涙がこみ上げた。

「……っ」

きっと、歯を食いしばる。
年下にこんなことを言われて、主導権は完全に彼で…。

屈辱と羞恥がぐるぐると頭をかけ巡る。
彼女の身代わりが何だとか、小さい声を出さなきゃとか、いろいろと重要なことが、すっぽりと頭から抜けた。
そして、ピコ、と、またあの音。

→〈流される
〈怒る
〈逃げる

その〔選択肢〕にまた、怒りがこみ上げる。
怒る？有り得ない。
逃げる？これも有り得ない。
答えが決まってるような〔選択肢〕なら与えるんじゃないわよ！！

顎をくいっと持ち上げられ、絡まった視線。
不覚にもドキリとした。いや、嫌な意味でだが。

金の睫に縁取られたパチリと開いた瞳が印象的な、整った可愛らしい柔和な顔つき。すっと細められた目は、睨むかのように私を見ている。
……いや、睨まれている。
な、何故？　気づいた？
私が彼女でないと、気がついたのだろうか。

冷や汗が流れる。と、同時に彼の瞳が閉じられ、ふっと影が落ちた。

「！」

ふわりと、冷たい感触。

それが彼の唇だと気がついて、私はますます身を堅くした。

そして、現れる〔選択肢〕。

〈抱かれる

決定。

ないような〔選択肢〕なんて、〔選択肢〕じゃないっていってるじゃないか！なのに、選ばせるなんて残酷すぎる。流されるだけなら言い訳できるのに、〔選択肢〕のせいで、私はいつも、この結果は自分の選択が招いたことなのだと認識しなくちゃいけない。

必然的に、結果に責任を持たなきゃいけない。自分が望んだことと正反対であっても。

嫌がるなんて、できない。

逃げることだって、できない。

――――私には、何かに強制的に定められた運命しか持たないのだ。

するりと、ネグリジェが肩から落ちた――――。

▼▲▼▲

彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理されません。
彼女の願いは受理さ――……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9261z/

世界の予定と私の役割

2011年12月29日00時45分発行